

古城と河と博物館と

佐々木 利和 (ささき としかず)

本館先端人類科学研究部



ハイデルベルク
民族博物館／ドイツ

である。

という悲しい歴史をもつハイデルベルク民族博物館であるが、通りのはずれとはいえ、ハイデルベルク旧市街でパレ・ワイマルとよばれる重厚で歴史的な建造物である。一八世紀初頭のこの建物から望む古城も河もきわめて美しい。この博物館の三階に館長のマルガレータ・バヴァロイ博士が住んでいる。たぶん世界一の館長公舎であろう。

われわれが訪れたとき、バヴァロイ博士が館内を案内してくださった。現在はアフリカの展示をおこなっ

この三月、民博の同僚とドイツの民族学系博物館を訪れた。今年は欧州も暖冬とかで、暖かい日々が続くロッカスの花が咲き誇っていた。ドイツの旅のはじまりはハイデルベルクである。

ハイデルベルクは古城と河と大学の街である。M・フエルスターの戯曲『アルトハイデルベルヒ』に涙した年配の人も多からう。それ故か日本人がもつとも憧れるドイツの都市である。この街の大学―ハイデルベルク大学はドイツでももつとも古い大学のひとつであり、東洋美術史研究所があり、日本美術史の教員もいる。ハイデルベルク大学は日本の大学のようにまとまったキャンパスがない。街のあちこちに研究所や教室がある。

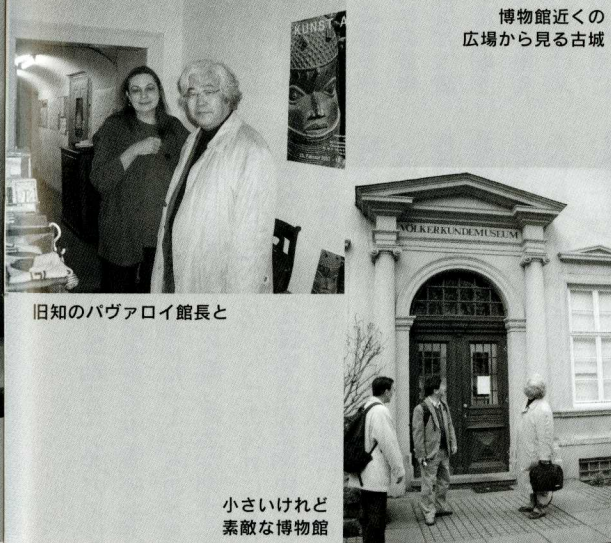
その街の中央通りはまた観光の中心でもある。古いホテルや教会があり、広場があり、古城が望める。古城といえばネッカー河にかけられたアルトブルッケン(古い橋)から見た城は絶景である。この景観を求めて人が来るといつても過言ではあるまい。

中央通りのはずれ近く。もう、観光客のすがたもまばらになったところにハイデルベルク民族博物館がある。正式には「ヨセフィーネ、エドワード・フォン・ポルトハイム基金ハイデルベルク民族博物館」という。一九一九年に設立されたこの博物館の創設者は結晶学者であるヴィクトア・ゴールドシュミット。彼はまた芸術における色彩という観点から多くの民族資料に注目した。とりわけ日本の浮世絵には深い関心をもち、積極的な収集に努めている。そのほかにも彼の視点はアフリカ、オセアニア、オリエント、東アジア、アメリカ、ヨーロッパにおよび、数多くの資料を集めた。しかし彼はユダヤ人であったため、ナチスの迫害を受け、自らの命を絶っている。彼と彼の基金もナチスによって莫大な損害を被り、今日に彼が遺したものはこの民族博物館のみ

ているが、近く日本美術の展示をおこないたいとおっしゃる。浮世絵だけではなく、この博物館の日本資料には民俗学的にもおもしろいものがある。どういふ展示がなされるか興味深いところではある。

ハイデルベルクはまたネッカーワインの産地でもある。民族学博物館を訪ね、古城にある薬事博物館を訪ねた。時差も加わって歩き疲れたからだをビールとワインが癒してくれたのはいうまでもない。さて、つぎはミュンヘンである。明日も暖かそうな予感のするハイデルベルクの夜空であった。

博物館近くの
広場から見る古城



旧知のバヴァロイ館長と

小さいけれど
素敵な博物館



博物館のアフリカ特別展の一部、
ベニンの彫刻